

東京大学大学院人文社会研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

高村峰生 （東京大学 人文社会系研究科 客員研究員）

最終報告提出日 2011年10月6日

研究課題名：モダニズムの時代におけるテクノロジー、触覚、美学
Technology, Tactility and Aestheticism in The Age of Modernism

派遣先：米国、イリノイ州シャンペーン、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、
Prof. Nancy Blake

派遣期間 出発日：すでに現地に滞在中、4月1日からが派遣期間
帰国日：9月22日
総日数：175日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

本研究は、Walter Benjamin, D.H. Lawrence, Alfred Stieglitz を中心的な研究対象にして、彼らの作品に現れる触覚を機械文明に対するアンチテーゼとしてモダニズムに特徴的な言説として歴史化し、モダニズム期の身体観・人間観に新たな視座を与える試みである。身体の外界との直接的なかわりがテクノロジーの媒介によって損なわれるとき、接触が詩学・哲学的な言説の上に現れる、というのが本プロジェクトに一貫するテーゼである。この論文は全て英語で書かれ、完成後、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の比較世界文学学科に博士論文として提出し、派遣期間中に最終口頭試験を受ける。

(2) 実際に達成された成果

博士論文そのものは2008年から執筆していたので、派遣期間中は何か新しい内容を付けたすよりは、すでに書かれたものを改稿しながら英語の間違いを直していくことや、事実関係や文献を再確認する作業に費やされた。英語については、単に文法的に間違いがないようにするだけでなく、英語として合理的かつ自然に読める文章にするために細心の注意を払った。この過程では、英語を母語とする現地の友人たちのお世話になった。また、膨大な蔵書量を誇るイリノイ大学の図書館も調査を進めるにあたって不可欠なものであった。口頭試験は8月19日に行い、一人の主査と三人の副査を前に、30分で論文の内容を説明した後、1時間ほどの質疑応答を行った。鋭い質問などもあったが、論文に対する反応は好意的なものであり、落ち着いて論文の意図や射程、執筆プロセスについて説明することが出来た。口答試験のあとは、要約、謝辞、目次、ページ数など博士論文の形式に関わる作業を行った。最終的な論文の受理は、現地を出発する直前の9月21日になされた。

(3)

今後数年間は、博士論文を本にまとめて出版するために力を尽くすつもりであるが、文学、美術、哲学における身体とテクノロジーについて常に広い視野からアプローチを続け、特にアメリカ文学については、スティーグリッツ・サークルの重要性の再評価を行いたいと考えている。写真家スティーグリッツを中心とする芸術家集団は文学、批評、絵画、写真のようなジャンルを横断しながら、ニューヨークをヨーロッパのモダニズムと接続する媒体として機能し、アメリカのモダニズムの重要な基礎を築いた。たとえば、雑誌 *Camera Work* は、ガルトロード・スタインの最初の作品の発表媒体となるなど、間アトランティック的なモダニズム言語やイメージを形成した。このサークルの歴史的な意義について考察するとともに、それに深く関わっていたポール・ローゼンバーグやウォルドー・フランクなど、これまであまり注目されていなかった作家や批評家も見直していきたい。また、このサークルは極めて国際的なつながりを持っていたが、同時代のヨーロッパの前衛芸術とどのような関係があるのか、大学院時に身につけた比較文学的な見地から考察していくつもりである。